共・友・知
松戸のとも庭

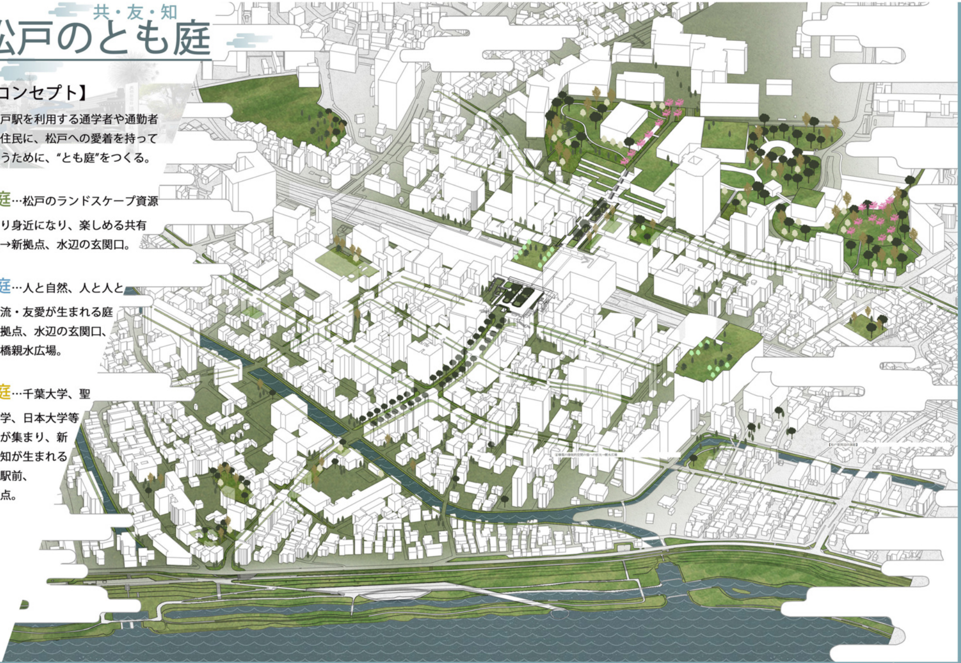
【コンセプト】

松戸駅を利用する通学者や通勤者等の住民に、松戸への愛着を持ってもらうために、“とも庭”をつくる。

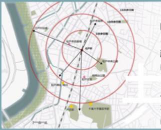
共庭…松戸のランドスケープ資源がより身近になり、楽しめる共有の庭→新拠点、水辺の玄関口。

友庭…人と自然、人と人との交流・友愛が生まれる庭→新拠点、水辺の玄関口、春雨橋親水広場。

知庭…千葉大学、聖徳大学、日本大学等の知が集まり、新たな知が生まれる庭→駅前、新拠点。



【松戸駅周辺の現状】 番号60



・松戸駅は、都内を除く関東地方で乗降客数が12位であり、多くの人が集まるエリアであるが、互いに交流する場所と機会がなく、ただ通り過ぎるだけになっている。

・松戸には江戸川、相模台、戸定庭園、国立大唯一の園芸学部など、特徴的なランドスケープ資源があるが、十分に活かしきれていない。

・特に松戸駅周辺やシンボル軸では、緑が極端に少なく、「園芸学部があるまち」らしさが感じられない。

・緑地空間やオープンスペース、公共施設は分散して立地しており、市の活力を触発する拠点的な場所がない。

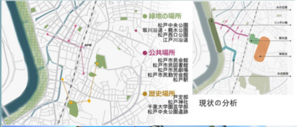
・まちを構成する個々の建物と公共空間は、敷地境界線によってはっきりと区切られ、まちや人々の交流を分断している。

↓

松戸に対する愛着が沸かない

松戸駅西口

松戸駅東口


● 緑地の場所
松戸中央公園
坂川沿道・親水公園
松戸西口公園
江戸川沿道
● 公共場所
松戸市民会館
松戸市民図書館
松戸市民劇場
松戸市民勤労会館
松戸駅
● 歴史場所
戸定邸
松戸神社
千葉大学園芸学部
松戸中央公園遺跡

現状の分析

【なぜ庭園や公園よりも、「庭」の方が身近さや愛着を感じるのか】

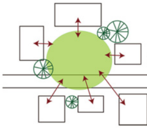
家の庭	とも庭
毎日見る、通る	人が集まり、目に留まる場所にこそ緑を創出 隠れて埋もれているランドスケープを、見えるようにする
アクティビティの自由度が高い	人々に積極的に利用されるようにする工夫
オリジナリティがある	「松戸のアイデンティティ」を大切にしたデザイン
庭いじり（自然とふれあう） 家族、友達との交流の場	人と自然、人と人との交流を生み出すしかけづくり

ダイヤグラムの説明→空間から問題を解決する

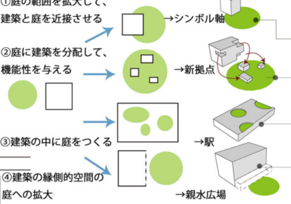
公共 × 民地

現状：
公共空間（道路、公園、河川）
と
民地（建築）の間に明確な敷地境界があり、まちは分断されている

4つの庭と建築の関係性のパターンにより、敷地境界を曖昧にし、共有的な都市空間としての魅力を高める。



→具体的な解決策

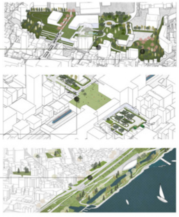


①庭の範囲を拡大して、建築と庭を近接させる →シンボル軸

②庭に建築を分配して、機能性を与える →新拠点

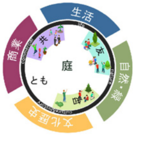
③建築の中に庭をつくる →駅

④建築の縁側的空間の庭への拡大 →親水広場



→ソフトプラン

集める → 置く 植物を栽培する → 公園 緑地スポット 坂川沿道 → コミュニケーション 繁栄ぶり


生活
life
自然・緑
nature
文化歴史
culture&history
商業
commercial
共
友
知
庭
とも

1. home・コミュニケートのセンター

公共的な緑の空間をhome・コミュニケートセンターとしてつくる。住民たちが気になる設備を提供し、実際には公共の空間としても、個人的な環境が作れる。そして、周りの住民が交流できる場所を作り出す。

ペットスポット

2. みんなの庭を一緒に整えましょう

市民を組織して一緒に、公園と緑の空間を掃除と栽培する。まるで自宅の庭のように整理する。

3. 栽培、収獲、party time

自分で作った野菜をシェアし、販売する。住民たちが収獲パーティーを開催、さらにまちづくりに関する意見を交流する事ができる。